

大谷大学蔵『判比量論 Panbiryangron パンビリヤンノン』

の判読と解釈

権仁瀚 Gweon Inhan クォン・インハン
(成均館 Seong'gyun'gwan ソンギュングァン大学)

1. 資料紹介

- 所蔵：大谷大学図書館(請求番号：餘乙-85-1)
- 内容：玄奘の因明学(仏教の認識論と論理学)と関連する様々な比量(anumāna：すでに知っている事実によってまだ知りえない事実を推論すること)の妥当性を批判的に検討した独創的論書。¹⁾
- 書誌：卷子本 1 巻き，27.2×178.0cm，²⁾茶毘紙。³⁾
卷首欠，本文 3 紙 105 行(1 行 18～21 字)+空白紙+卷末 廻向偈 2 行・筆写記 3 行で構成。1988 年，日本の重要文化財に指定される。
 - 第 1 紙：35 行(第 7 節後半～第 10 節 4 行)
 - 第 2 紙：35 行(第 10 節 5 行～第 11 節 19 行)
 - 第 3 紙：35 行(第 11 節 20 行～第 14 節 7 行)
- 時期：咸亨 2 年(辛未，671) 7 月 16 日撰述。7 世紀末または 8 世紀初期，新羅において書写された直後に角筆が記入され，733 年以前に日本に伝来した可能性(権仁瀚 2016: 9-10)。



※ 資料調査日程及び成果



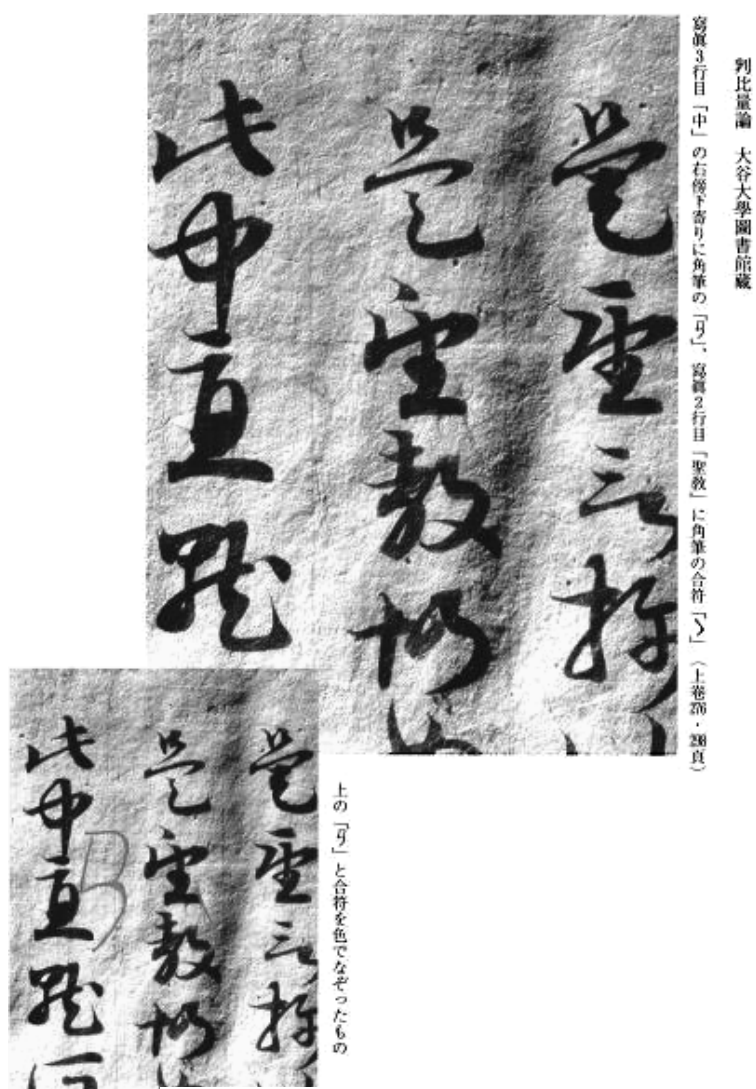
資料調査場面 (2016. 08. 26. 大谷大学博物館)

- 日時：2016 年 8 月 25 日(午前，午後)～26 日(午前)
- 場所：大谷大学博物館，展示準備・実習室
- 調査者：鄭在永 Jeong Jaeyeong チョン・ジェヨン，權仁瀚
- 成果：①角筆字及び符号の間の相対的鮮明度確認
‘合符線>梵唄符>角筆字’ (それぞれ異筆によってこの順序通りに角筆が記入された可能性有り) ←022-4~5[梵唄符+角筆字]，025-2~3 聖教[合符線]([写真 1, 2]参照)
- ②小林先生が未報告の角筆字及び符号発見(波形下線部分)
021-1 不[聲點_左下](定)
022-4~5 當知[梵唄符_右上上向+角筆字_只]
036-10~11 若言[梵唄符_右上上向+聲點_右上+角筆字_白_左下]
廻向偈 第 1 字 證[梵唄符_左下下向] など.

[写真 1] 022-4~5 梵唄符+角筆字

| | |
|---|---|
|  |  |
| <p>『大谷大学図書館報』19 所載写真</p> | <p>筆写移点</p> |

[写真 2] 025-2~3 合符線



小林芳規(2004a: 58) 所載 寫眞

2. 原文判読及び解釈

2.1. 原文判読

- ① 김성철 Gim Seongcheor キム・ソンチョル教授の再校訂本(김성철 2003: 60-69)に基づいて、判読異見字の原文字形及び『大書源』字形資料を参考に提示し、理解の便宜を図ったものである。

※ 縦書→横書、上添字：補入字，A：推読字(ただし、欄上の節表示字の八，九，十……などは除外)

- ② 既存の判読論著の略号

[富]=富貴原章信(1967)の判読，[崔]=이영무 Yi Yeongmu イ・ヨンム(1973)に紹介された崔凡述 Choe Beomsur チウエ・ボムスル(曉堂)の判読，[韓]=『韓國佛教全書 1』(1979)の判読，[신]=申賢淑 Sin Heonsug シン・ヒョンスク (1988)の判読，[김]=김성철(2003)の判読。

- 001 定過亦能破彼是等難故又應定問汝言非顯⁴⁾淨
002 土言中淨土之惠⁵⁾爲舉淨土之體爲不舉耶⁶⁾若言
003 舉者則違自宗此淨土教能顯⁷⁾淨土故若不舉
004 者不違他宗非顯⁸⁾之言不遮⁹⁾淨土故於此兩兩¹⁰⁾關¹¹⁾心
005 弁彼意在¹²⁾前則墮¹³⁾自語相違過失若彼救言此
006 淨土惠¹⁴⁾舉淨土體而之惠¹⁵⁾不入淨土之教故無自語
007 相違過者則以此惠¹⁶⁾亦成不定如是進退皆不應理
008 二量
009 八 || 執四分者爲破三分立比量云自證必¹⁷⁾有卽¹⁸⁾體能¹⁹⁾證
010 心分攝故猶如相分自證應非心分所攝以無卽²⁰⁾體
011 之能證故如兔角等判云此二比量是似非眞皆不
012 能離不定過故謂自證分爲如相分心分攝故有
013 卽²¹⁾體能證爲如眼識生相心分攝故無卽²²⁾體能證如
014 是前因有不定過又自證分爲如兔角無卽²³⁾體能
015 證故非心分攝爲如耳識相分三相無卽²⁴⁾體能證
016 故是心分所攝如是後因亦有不定若彼救言五識三
017 相不離體故是其自證之所緣境理亦不然相分三
018 相不離相故五識見分亦得緣^故此若不許彼何得然
019 設許彼前此必不許五識能²⁵⁾緣法界諸²⁶⁾處法相雜
020 亂違理教故只由如是相分三相於彼二因足²⁷⁾作

021 不定設彼救言相分三相非心分攝則有比量相
022 違過失當知第四分有言而無義 二量
023 九 || 無性攝論爲成第八對彼小乘立二比量謂八識教
024 是聖言攝²⁸⁾似²⁹⁾無我故如四阿含又八識教契當道理
025 是聖教故³⁰⁾如六識教如是展轉證³¹⁾有八識今³²⁾於
026 此中直就所詮而立比量證^{第 八 識}³³⁾謂眼耳鼻識
027 必有舌身意識不攝餘別³⁴⁾識體^三³⁵⁾六門中三識攝故
028 猶如舌身意識此中極成六識爲他異³⁶⁾品自許八識
029 爲自異³⁷⁾品三識攝因於彼不轉是故此因決定能
030 立若以轉識攝故爲因則於他異³⁸⁾轉設^以³⁹⁾是識性故爲
031 因亦於自異⁴⁰⁾品皆不能離不定過也 三量
032 十 || 成唯識論立比量言第八必有俱⁴¹⁾有所依是識性
033 故如六識等此因不定有等難故謂有立言第八必無
034 俱⁴²⁾有所依是根本故猶如眞如若言此有有法差別
035 相違過失能成第八是無爲故是則前因亦有是

===== <以上，第 1 紙>

036 過能成第⁴³⁾八是轉識故若言自害⁴⁴⁾故不成難彼亦
037 違自故非難也今者別立賴耶末那必無俱⁴⁵⁾有所依
038 之根非六識性之所攝故如眼根等若難此因有
039 相違過能成七八非能緣性如眼根等此亦不然由
040 心所法成不定故若言望前亦有不定以心所法
041 非六識性有所依故此非不定以前立言所依^根故若
042 望心所但是所依非所依根法處所攝不待根故
043 是故彼宗雖知依與所依差別未解所依與根有
044 異⁴⁶⁾若論所依通於八識及與心所其所依根不通
045 心所及於七八有破此宗立比量云意識^俱⁴⁷⁾有根
046 定非能^能⁴⁸⁾緣性六識心心所之所不攝故六識^俱⁴⁹⁾有
047 根隨^一⁵⁰⁾所攝故如眼根等彼宗^反⁵¹⁾以法處所攝色法
048 爲意故作是難⁵²⁾此塵通破大乘諸宗然有相違
049 決定過生謂立意根必非色性有分別識不共
050 依故如第六識俱有作意由此等難彼因不定
051 五量
052 十一 || 如聲論師立聲爲常所聞性故若對勝論相違
053 決定對佛第⁵³⁾子不共不定以無共許同品法故有
054 難此因立比量言所聞性因應非疑因同品無故
055 如相違因又立此因應非不定異⁵⁴⁾品無故猶如正因

056 備法師云理門論言一向離故是通彼難謂立宗
057 言^所聞性因是不定攝一向離故如共不定一向離
058 言闕⁵⁵⁾一相也
059 判云此因有不定過以所見性雖⁵⁶⁾闕⁵⁷⁾一相而非不定
060 是不成故謂立聲無常所見性故此因同有異⁵⁸⁾無
061 唯闕⁵⁹⁾初相是故亦爲闕⁶⁰⁾一相也若爲避此不定過
062 故更立因言後二相中闕⁶¹⁾一相故猶如共等四不定
063 因此因亦有餘不定過如於空⁶²⁾宗緣生故因雖於
064 後二相中闕⁶³⁾一而是眞因非不定故故不能作相違
065 決定又前所立異⁶⁴⁾品無故非疑因者亦有不定如
066 諸相違決定之因雖異⁶⁵⁾品無而是疑因故唯有
067 同品無故之因且離不定立非疑因此中應立相
068 違比量謂所聞性不定因攝等立相違宗故猶如
069 共不定因如理門論顯⁶⁶⁾此因云以若不共所成立法
070 立所有差別遍攝一切皆是疑因唯彼有性彼

===== <以上，第2紙>

071 所攝故一向離^故案云不共所成立者如立聲常所
072 聞性故或立無常所聞性故如是一切無不等立
073 故言所有遍攝一切由是道理所聞性因望彼一
074 切皆是疑因一向離故者轉成等立諸宗之義以
075 望諸宗皆同不共皆同是一向義不共是其⁶⁷⁾離
076 義由一向離故等立於諸々宗々相違故其因是
077 不定 五量
078 **十二** || 相違決定立二比量文⁶⁸⁾軌⁶⁹⁾法師自作問答問具足
079 三相應是正因何故此中而言不定答此疑未決
080 不敢解之有通釋者隨而爲臣⁷⁰⁾此中問意立比量
081 云違決中因應是正因具三相故如餘眞因今
082 者通曰違決之因非正因攝有等難故如相違
083 因由此顯⁷¹⁾彼有不定過又此二因非相違攝同品
084 有故猶如^正因⁷²⁾又此二因非不成攝是共許故如不
085 共因⁷³⁾如是二因不定因攝非正非違非不成故如餘
086 五種不定因也
087 **十三** || 或有爲難五種々⁷⁴⁾性立比量言無性有情必當作
088 佛以有心故如有性者此因不定故成不難爲如諸
089 佛以有心故非當作佛爲如菩薩以有心故必當作佛
090 前⁷⁵⁾別⁷⁶⁾立因言以未成佛之有情故此因亦有他不

091 定過爲如菩薩種性爲如決定二乘若爲避此更
 092 立宗言無性性:⁷⁷⁾有情決定二乘皆當作佛以未
 093 成佛有情攝故猶如菩薩此有等⁷⁸⁾難故成不定如
 094 是三人非當作佛以無大乘無漏種子而非菩薩種
 095 性攝故如木石等諸無情物又有比量相違過
 096 失謂五種姓⁷⁹⁾中餘四種姓⁸⁰⁾墮地獄時應有四德許
 097 作佛故如菩薩姓許則違教不許違理此違自悟⁸¹⁾
 098 比量過也 五量
 099 **十四** || 成唯識論爲破我法立比量言凡諸我見不緣實
 100 我有所緣故如緣餘心我見所緣定非實我是
 101 所緣故如所餘法又言外道餘乘⁸²⁾所執諸法異⁸³⁾心
 102 々所非實有性是所取⁸⁴⁾故如心々所能取⁸⁵⁾彼覺亦
 103 不緣彼是能取⁸⁶⁾故如緣此覺判云此中有四比量
 104 是眞能破破我法故無過生故或因此破破大乘
 105 云諸緣第八識見不緣阿賴耶相有所緣故如緣

===== <以上, 第 3 紙>

證成道理甚難思 自非笑却微易解

今依聖典舉一隅 願通佛道流三世

判比量論一弓 釋元曉述


咸亨二年歲在辛未七月十六日住行

名寺着筆租訖


===== <以上, 卷末 5 行>

2.2. 原文解釈

- ① 判読時の補入字, 推読字をすべて普通字に転換し, 召성철教授の韓国語訳(召성철 2003: 400-411)をもとに, 文脈の流れ上重複する部分や用語上不一致(例: 誤謬~過ち[過]→誤謬, 論証式~推論式[比量]→比量式, 同等な~対等な批判[等難]→同等な批判, など), 段落区分の不均衡を最小化する一方, 角筆字または符号が指示するところを反映するなど, 可能な範囲内での正解を模索した.
- ② 角筆文字及び符号は, 2016. 8. 25~26 の調査結果を[]の中に反映した.

※ 當知[ 梵唄符 B_右上-右向; 知^{平聲}+ 角筆字 只]

: 小林の未報告点(波形下線),

不待根*]: 小林の既報告点のうち、筆者確認不能点。

第7節：浄土は現れないという眺望[慧]についての論破

001 定過亦能破彼。是等難故。

[…… (不)定の誤謬[過(失)](があつて)やはりそれを論破することができる。等難であるがゆえに(=同等な批判[等難]がありうるがゆえに).]

又應定問。汝言非顯淨 002 土言中、浄土之惠爲舉浄土之體、爲不舉耶？若言 003 學者、則違自宗。此浄土教能顯浄土故。若不舉 004 者、不違他宗。非顯之言不遮浄土故。於此兩兩關、心 005 弁彼意在前、則墮自語相違過失。

[また必ず問わなければならない。汝が言う‘現れない浄土’という言葉において、浄土についての(汝の)眺望[惠=慧、以下同じ]⁸⁷⁾は、①浄土それ自体について論じているのか、②論じていないのか、③万一論じているのならば、自身の主張[宗]に背く。浄土についてのそのような教えにおいては(そのような眺望によって)、十分に浄土を‘現わして’いるがゆえである。④万一論じていないのならば、他派の主張[宗]に背かない。‘現れない’という言葉が、浄土を否定するわけではないがゆえである。このような2種類(①②)と2種類(③④)の関門について、心によって判別[弁=辨・辯]してみて、その意が前のほう(①③)にあるとすれば、自語相違の誤謬⁸⁸⁾に陥ることになる。]

若彼救言、此 006 浄土惠舉浄土體、而之惠不入浄土之教故、無自語 007 相違過者、則以此惠亦成不定。如是進退皆不應理。008 二量。

[万一そのような誤謬(窮地)から抜け出すために、‘このような浄土についての眺望は、浄土それ自体を論じることではあるが、このような眺望は浄土についての教えに入らないがゆえに、自語相違の誤謬がない’と言うとすれば、まさにこのような眺望によって、やはり不定を成してしまう。このように、進もうが退こうが、すべて道理に合わない。以上、2種類の量。]

第8節：護法の‘識の四分説’についての批判

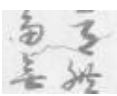
009 八：執四分者，爲破三分，立比量云，自證必有即體能證。010 心分攝故。猶如相分。

自證應非心分所攝。以無[] 梵唄符 A_右上-右向；無平聲]即體 011 之能證故。如兔角等。

[第8節：(識)の四分説を主張する者は、三分説を論破するために、比量式を立てて、以下のように言う。〈宗=主張〉自證分⁸⁹⁾は、‘即體能證’⁹⁰⁾を必要とする。〈因=理由〉心分に含まれるがゆえに。〈喩=実例〉あたかも相分のごとく。〈宗〉自證分は決して心分に含まれないようではなければならない。〈因〉‘即體能證’が必要でないがゆえに。〈喩〉あたかも兔の角などのごとく。]

判云：此二比量是似非眞。皆不 012 能離不定過故。謂，自證分爲如相分，心分攝故，有 013 即體能證？爲如眼識生相，心分攝故，無即體能證？如 014 是前因有不定過。

[批判的に論議してみれば、以下のごとしである。以上の2種類の比量式は、もっともらしくはあるが、真ではない。これらがすべて不定因の誤謬から抜け出せないがゆえである。すなわち、自證分は相分⁹¹⁾のごとく、心分に含まれるがゆえに即體能證を必要とするのか、(そうでなければ)眼識⁹²⁾の生相⁹³⁾のごとく、心分に含まれるがゆえに即體能證を必要としないのか。このように先にあげた因は不定の誤謬を持つ。]


又自證分爲如兔角，無[] 梵唄符 A_右上-右向；無平聲]即體能 015 證故，非心分攝？爲如耳識相分三相，無即體能證 016 故，是心分所攝？如是後因亦有不定。若彼救言，五識三 017 相不離體故，是其自證之所緣境，理亦不然。



[また、自證分は兔の角のごとく、即體能證を必要としないがゆえに、心分に含まれないものなのか。耳識の相分三相(生・住・滅)のごとく、即體能證を必要としないがゆえに、心分に含まれないものなのか。このように後で聞いた因も不定の誤謬を持つ。万一彼がこのような誤謬から抜け出すために、‘五識の(相分の)三相は体から抜け出すものでないがゆえに、これはその(五識の) 自證分の対象である’と言っても、道理に合わない。]

相分三 018 相不離相故，五識見分亦得緣故。此若不許，彼何得然？ 019 設許彼前，此必

不許，五識能緣，法界諸處，法相雜 020 亂[] 梵唄符 B_左下-下向；亂去聲]。違理

教故。只由如是相分三相，於彼二因，足作 021 不[] 梵唄符 B_左下-下向+聲點



__o□; 不去、入聲] ⁹⁴⁾定[ 聲點 __o□; 定去聲]. 設彼救言, 相分三相非心分攝, 則有比



量相 ₀₂₂ 違過[ 梵唄符 B_右下-上向; 過去、平聲]失[ 梵唄符 B_左上-上向; 失

入聲]. 當知[ 梵唄符 B_右上-右向; 知平聲+角筆字 只] ⁹⁵⁾第四分有言而無義. 二量.


[(五識の)相分の三相は, 相から抜け出したものではないがゆえに, 五識の見分がやはり対象と見なすことができるがゆえである. 万一この論証を認めないとすれば, あの論証はどうして正しいことがありうるだろうか. たとえ前のあの論証は認めても, この論証は認められないとすれば, 五識(の自證分)が法界すべてを対象と見なす格好になり, 法相がめちゃくちゃになってしまう. 道理と教えに背くがゆえである. まさにこのような論議によって, ‘相分の三相’ は, その2種類の因を十分に不定因にすることができるものである. ⁹⁶⁾たとえ彼が誤謬から抜け出すために, ‘相分の三相は心分に含まれるものではない’ と言うとすれば, 比量相違の誤謬が生じることになる. 第4分という言葉のみがあるだけで, 道理に合わないことを, 必ず知らなければならないぞ. 以上, 2種類の量.]


第9節：第8識の存在についての証明




 ₀₂₃ 九: 無性攝論爲成*[]第八, 對彼小乘立二比量. 謂, 八識教 ₀₂₄ 是聖言攝. 似

無我故. 如四阿含. 又八識教*[]契當道理. ₀₂₅ 是聖教[ 合符線]故. 如六識教. 如是展轉證有八識.

[第9節：無性の『攝大乘論釋』⁹⁷⁾においては, 第8識の存在を証明するために, 小乗を相手に2種類の比量式を立てる. すなわち, <宗>八識⁹⁸⁾の教えは聖言に含まれる. <因>無我の教えと類似しているがゆえに. <喩>あたかも四阿含のごとく. また, <宗>8識の教えは道理に符合する. <因>これが聖教であるがゆえに. <喩>あたかも6識の教えのごとく. このように, 論議を進行させ, 8識が存在することを証明する.]


今於⁰²⁶此中[]角筆字良]，直就所詮，而立比量，證第八識。謂，眼耳鼻識，⁰²⁷必

有舌身意識不攝餘*[]別識體。三六門中，三識攝故。⁰²⁸猶如舌身意識。此中極成

[]梵唄符 B_右上-上向；成平聲]六識*[]，爲*[]他異品。自許八識⁰²⁹爲自異品。三識攝因，於彼不轉。是故此因決定能⁰³⁰立。

[ところで、今ここでは直接その意味[所詮]に進み、比量式を立て、第8識を証明してみよう。すなわち、〈宗〉眼耳鼻識は舌身意識に含まれない別途の識体を必要とする。〈因〉三六門中の3識に含まれるがゆえに。〈喩〉あたかも舌身意識のごとく。ここで両方すべて認める6識は、他派の異品⁹⁹⁾に該当する。(また、大乘唯識家である)自派が認める8識は、自派の異品に該当する。‘3識に含まれる’は、因は(自派の異品である8識、及び他派の異品である6識)両方(?)に適用されない。したがって、(‘3識に含まれるがゆえに’という)この因は確固として成立しうる。]

若以轉識攝故爲因，則於他異轉，設以是識性故爲⁰³¹因，亦*[]於自異品，皆不能

離*[]不定過也。三量。

[万一，‘転識にふくまれるがゆえに’を因と見なすことになれば，(異品遍無性¹⁰⁰⁾に背き)他派(=小乗)の異品に適用されるし，たとえ‘識性であるがゆえに’を因と見なすとしても，(異品遍無性に背いて他派である小乗だけでなく)自派(=大乘唯識)の異品にもやはり適用され，(このような2種類の因)すべて不定の誤謬から抜け出せない。以上，3種類の量。]

第10節：阿頼耶識は俱有する所依(または所依根)を持つという護法の主張についての論破

⁰³²十：成唯識論立比*[]量言。第八必有*[]梵唄符 B_左下-下向；有上聲]俱有所依。是識性⁰³³故。如六識等。

[第 10 節：『成唯識論』¹⁰¹⁾においては、比量式を立て以下のごとく言う。〈宗〉第 8 阿頼耶識¹⁰²⁾は、必ず俱有所依を持たねばならない。〈因〉識性があるが故に。〈喻〉あたかも 6 識などのごとく。]

此因不定。有等難故。謂、有立言、第八必無⁰³⁴俱有所依。是根本故。猶如眞如。若言



[梵 唎符 B 右上-上向+聲點 □°; 言^{平聲} +角筆字 左下 白]此有有法差別⁰³⁵相違過失、能成第八是無爲故、是則前因亦有是⁰³⁶過。能成第八是轉識故。若言



[自 唎符 B 右上-上向+聲點 □°; 言^{平聲} +角筆字 左下 白]自害故不成難、彼亦⁰³⁷違自故非難也。

[(しかし)ここに使用された因は不定因である。なぜならば、同等な批判があるがゆえである。すなわち、以下のごとき比量式を作成することができる。〈宗〉阿頼耶識は、決して俱有所依¹⁰³⁾を持たない。〈因〉根本的なものであるがゆえに。〈猶〉あたかも眞如¹⁰⁴⁾のごとく。万一‘ここには有法差別相違の誤謬があることになる。第 8 識が無爲法¹⁰⁵⁾であることを証明する格好になるがゆえである。’と言うならば(申し上げるならば)、¹⁰⁶⁾前の因もやはり同一な誤謬を持つ。第 8 識が転識であることを証明する格好になるがゆえである。万一(私の批判が)自らを害するがゆえに批判にならないと言うならば(申し上げるならば)、それもまた自らに背くがゆえに批判にならない。]



今者[今 合符線]別立、頼耶末那必無俱有所依⁰³⁸之根。非六識[識 唎符 B 左上-下向; 識^{入聲}]性之所攝[攝 角筆字 捷?] ¹⁰⁷⁾故。如眼根等。

[今、別途に以下のごとき比量式を作成する。〈宗〉阿頼耶識と末那識¹⁰⁸⁾には俱有する所依根がなくてこそ正しい。〈因〉六識性に属したものではないがゆえに。〈猶〉あたかも眼根¹⁰⁹⁾などのごとく。]

若難此因有⁰³⁹相違過、能成七八非能縁性、如眼根等、此亦不然。由⁰⁴⁰心所法成不定



故。若言望前亦有不定。以心所法⁰⁴¹非六識性、有所依故、此非不定[以 合符線]。以



前立言所依根故。若 042 望心所，但是所依非所依根，法處所攝不待根*[]¹¹⁰⁾故。
043 是故彼宗，雖知依與所依差別，未解所依與根有 044 異。

[万一，‘ここにおける因は相違の誤謬を持つ。‘<宗>第 7 識と第 8 識は能縁性¹¹¹⁾ではない。<猶>あたかも眼根などのごとく’という点を立証することになる。’と批判するならば，これもまた正しくない。(異品に)心所法¹¹²⁾(があること)によって，不定の誤謬を持つがゆえである。万一，‘前の場合もやはり不定の誤謬がある。心所法は六識性ではないが，所依¹¹³⁾を持つがゆえである。’と言うならば(申し上げるならば)，これもまた不定因ではない。前に比量式を立てて(我が)語ったことは，(所依ではなく)所依根であるがゆえである。心所の場合は，所依であるのみで所依根ではないので，法處¹¹⁴⁾に属したものは，根に依存しないがゆえである。故に，上のごとく主張する者は，たとえ能依¹¹⁵⁾と所依の違いを知っていても，所依と所依根に違いがあることを理解できないことになる。]

若論所依，通於八識及與心所。其所依根[]^根梵唄符 B_右上-上向；根_{平聲}]不通 045 心所及於七八。

[所依について論じるならば，八識と心所に至るまで(すべてがそれと)通じる。(しかし)その所依根は心所と第 7・8 識とは通じない。]



有破此宗，立比量云。意識俱有根[]^根梵唄符 B_右上-上向；根_{平聲}]，046 定非能縁性。六識心心所之所不攝故，六識俱有 047 根隨一所攝故。如眼根等。

[ある人は，このような主張を論破するために，以下のごとく比量式を立てて言う。<宗>意識の俱有する根は，決して能縁性ではない。<因>六識の心と心所が所属していないがゆえに，六識と俱有する根の中で，どれか 1 つに所属しているがゆえに。<猶>あたかも眼根などのごとく。]

彼宗反以法處所攝色法 048 爲意故，作是難。此塵通破大乘諸宗。然有相違 049 決定過生。謂，立，意根必非色性。有分別識不共 050 依故。如第六識俱有作意。由此




[]^根梵唄符 B_左下-下向；此_{上聲}]等難，彼因不定。051 五量。

[そのような主張においては，逆に法處に所属した色法を意だとするがゆえに，このような批判をするのである。このような批判は，大乘のすべての主張を破壊する

ことになる。それで、この場合は相違決定¹¹⁶⁾の誤謬が発生することになる。すなわち、(以下のごとく比量式を)立てることができる。〈宗〉意根は決して色性ではない。〈因〉有分別識が共に寄りかからないがゆえに。〈猶〉あたかも第6識と俱有する作意心所のごとく。このような同等な批判によって、そのような因は不定因になってしまうのである。以上、5種類の量。]


第11節：九句因¹¹⁷⁾の中、第5句[同品無，異品無]の因が不定因であることの論証

052 十一：如聲論師立，聲爲常，所聞性故。若對勝論，相違⁰⁵³決定。對佛弟(=弟)子，不共[ 角筆字 宮]不定，以無共許同品法故。

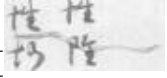
[第11節：例えば、聲論師が‘〈宗〉声は常住する。〈因〉耳に聞こえるがゆえに’と比量式を立てるならば、勝論師については相違決定の比量式のごとくである。仏弟子の見地においては、不共¹¹⁸⁾不定¹¹⁹⁾因を持つ比量式になるが、なぜならば誰でも認める同品¹²⁰⁾の法が存在しないがゆえである。]

有⁰⁵⁴難此因立比量言，所聞性因，應非疑因。同品無故。055 如相違因。又立此因應非不定。異品無故。猶如正因。

[ある人はこのような因を批判して、比量式を立て以下のごとく言う。〈宗〉‘耳に聞こえるがゆえに’という因は疑因でなくてこそ正しい。〈因〉同品に存在しないがゆえに。〈猶〉あたかも相違因のごとく。また、〈宗〉このような因は不定因ではない。〈因〉異品に存在しないがゆえに。〈猶〉あたかも正因のごとく。]




056 備法師云：理門論言，一向離故，是通彼難。謂，立宗⁰⁵⁷言。所聞性因[ 梵唄符 B_右下-上向；因^{平聲}]，是不定攝。一向離故。如共不定。一向離⁰⁵⁸言，闕一相也。[文備法師¹²¹⁾は以下のごとく言う。『因明正理門論』¹²²⁾においては‘どちらか一方が抜け出しているがゆえに’と言うが、これがそのような批判を解決する。すなわち、比量式を立てて言えば、以下のごとくである。〈宗〉‘耳に聞こえる’という因は不定因に含まれる。〈因〉どちらか一方が抜け出しているがゆえに。〈猶〉あたかも共不定因のごとく。(ここで)‘どちらか一方が抜け出している’という言葉は、(因の3相のうちで)‘1種類の相が欠如していること’を意味する。]


059 判云：此因有不定過。以所見性，雖闕一相而非不定，060 是不成故。謂，立。聲無常。

所見性[] 梵唄符 A_左下-右向；性去聲]故。此因同有異無。061 唯闕初相。是故亦爲闕一相也。


[批判的に論議してみれば以下のごとくである。このような因は不定の誤謬を持つ。なぜならば、‘目に見えるがゆえに’もまた 1 種類の相が欠如している因であるが、不定因ではなく、不成因¹²³⁾であるがゆえである。すなわち、‘<宗>声は無常である。<因>目に見えるがゆえに’という比量式が立てられる。ここに使用された因の場合、同品は存在するが異品は存在しない。ただし、第 1 相だけ欠如しているのである。故に、このような因もまた 1 種類の相を欠如している。]


若爲避此不定過 062 故，更立因言，‘後二相中，闕一相故。猶如共等四不定 063 因。’此


因亦有餘[] 梵唄符 B_右上-上向；餘平聲+角筆字 多留]¹²⁴⁾不定過。如於空宗，緣生故因，雖於 064 後二相中[] 角筆字 良]闕一而[] 梵唄符 B_右上-上向；而平聲]

是真因非[] 梵唄符 A_右上-右向；非平聲]不定故。’故不能作相違 065 決定。又前所立，異品無故，非疑因者，亦有不定。如 066 諸相違決定之因，雖異品無而是疑因故。

[ところで、万一このような不定の誤謬から抜け出すために、再び因を立て、‘<因>後の 2 相のうちで 1 つが欠如しているがゆえである。<猶>あたかも共不定因など 4 種類の不定因の場合のごとく’と言うならば、<宗>このような因もやはりまた異なる¹²⁵⁾不定の誤謬を持つ。いわば、‘<猶>空を主張するときの‘縁生するがゆえに’という因は、<因>たとえ後の 2 相(同品定有性¹²⁶⁾・異品遍無性¹²⁷⁾)のうちで 1 つが欠如していても、これは真の因であり、不定因ではないがゆえに’と言うことができるがごとく。ゆえに、相違決定の比量式でありえない。また、前ににおいて‘異品に存在しないがゆえに、疑因ではない’と立てたことがあるが、これもまた不定の誤謬を持つ。なぜならば、すべての相違決定因は、たとえ異品に存在しないが、疑因であるがゆえである。]

唯有 067 同品無故之因，且離不定立非疑因。此中應立[] 梵唄符 A_左上?-右向+聲點[°]□；立入聲]相 068 違比量，謂，所聞性不定因攝。等立相違宗故。猶如 069 共不定因。


如理門論顯此因云：以若不共所成立法，070 立所有差別[] 聲點[°]□+梵唄符 B_左

上-右上向；別入聲]遍攝一切皆是疑因。唯彼有性，彼₀₇₁所攝故。二[ 梵唄符 B_左上-右上向；一入聲]向離故。

[それで‘同品に存在しないがゆえに’という因だけ残ることになるが、(敵対者はそのような因を通じて)不定因から抜け出すこと，すなわち疑因ではないことを立証(しようと)する。これについては，‘相違(決定)の比量式’を立てなくてはならないが，すなわち，〈宗〉‘耳に聞こえるがゆえに’は不定因に含まれる。〈因〉相反する主張を同等に立てることができるがゆえに。〈猶〉あたかも共不定因の場合のごとく。『因明正異門論』においてもこのような因について，以下のごとく明らかにしている。万一，不共(不定)因として証明される(所證)法であるならば，証明される内容の中に一切がすべて入っていくことができるがゆえに，すべてがみな疑因である。なぜならば，そのような存在だけが含まれるがゆえである。すなわち，一様に抜け出しているがゆえである。]

案云：不共所成立者，如立聲常，所₀₇₂聞性故，或立無常，所聞性故。如是一切無不等立₀₇₃故，言所有遍攝一切。由是道理，所聞性因，望彼一₀₇₄切，皆是疑因。



[詳考してみれば，以下のごとくである。不共(不定)因として証明される法とは，例えば，‘〈宗〉声は常住する。〈因〉耳に聞こえるがゆえに’と証明するか，あるいは‘〈宗〉声は無常である。〈因〉耳に聞こえるがゆえに’と証明する場合のごとくである。ここで見るように，対等に成立しないことが全くないがゆえに，‘内容の中に一切がすべて入っていくことができる’と言うのである。このような道理によって，‘耳に聞こえるがゆえに’という因は，そのどのようなものについてであれ疑因になる。]


一向離故者，轉成等立諸宗之義。以₀₇₅望諸宗，皆同不共，皆同是一向義，不共是其離₀₇₆義。由一向離[ 聲點_□^〇；離平聲]故，等立於諸諸宗宗相違故，其因是₀₇₇不定。五量。

[‘一向離故’というものは，すべての主張を対等に成立させるという意味である。そのどのような主張についても‘皆全く同じく’[皆同]というものは，‘一様に’[一向]という意味であり，‘不共’というものは，‘抜け出している’[離]という意味である。‘一様に抜け出しているがゆえに’[一向離故]，相反した様々な主張について対等に立てられることができ，そのゆえにそのような因は不定因である。以上，5種類の量。]

第 12 節：相違決定比量式の 2 種類の因が不定因であることを論証

078 十二：相違決定，立二比量，文軌法師自作問答。問：具足 079 三相，應是正因，何故此中而言不定？答：此疑未決，080 不敢解之。有通釋者，隨而爲臣。此中間意

[ 梵唄符 B_左下-左下向；意去聲]，立比量[ 梵唄符 B_右上-上向；量平去

聲]081 云：違決中[ 角筆字 良]因，應是正因。具三相故。如餘眞因。

[第 12 節：相違決定の場合 2 種類の比量式が立てられるが，文軌法師¹²⁸⁾が自ら問答を作ったことがある。〈問〉三相を備えているので，これは正因でなくてはならない。ところが，どうしてこれについて不定因であると言ったのであろうか。〈答〉このような疑問は未だ解決されていないし，これを解説する考えも及ばない。これらの意味がよく通じるように解釈する人がいるならば，我はその人に従って臣下になるであろう。このような問いに込められた意味を比量式によって作成すれば以下のごとくである。〈宗〉相違決定の中の因は正因でなくてはならない。〈因〉三相を備えているがゆえである。〈猶〉あたかも他の眞因のごとく。]

今 082 者通曰：違決之因，非正因攝。有等難故。如相違 083 因。由此顯彼有不定過。

[今，意味を通じさせれば以下のごとくである。〈宗〉相違決定の因は正因に属しない。〈因〉同等な批判がありうるがゆえである。〈猶〉あたかも相違因のごとく。これによって，それに不定の誤謬があることが現れる。]

又此二因，非相違攝。同品 084 有故。猶如正因。又此二因，非不成攝。是共許故。如不 085 共因。如是二因，不定因攝。非正非違非不成故。如餘 086 五種不定因也。六量。


[また，〈宗〉このような 2 種類の因は相違因に含まれない。〈因〉同品が存在するがゆえに。〈猶〉あたかも正因のごとく。また，〈宗〉このような 2 種類の因は不成因に含まれない。〈因〉両方ともに認めるものであるがゆえに。〈猶〉あたかも不共因のごとく。〈宗〉このような 2 種類の因は不定因に含まれる。〈因〉正因でもなく相違因でもなく，不成因でもないがゆえに。〈猶〉あたかも他の 5 種類の不定因のごとく。以上，6 種類の量。]

第 13 節：‘五性各別説批判’についての元曉の再批判

087 十三：或有爲難，五種種性，立比量言。無性有情必當作 088 佛。以有心故。如有性者。

[ある者たちは五種の品性を批判するために、以下のごとく比量式を立てて言う。〈宗〉無性有情¹²⁹⁾は必ず成仏するであろう。〈因〉心があるがゆえに。〈猶〉あたかも有性有情のごとく。]

此因不定故，成不難。爲如諸⁰⁸⁹ 佛。以有心故。非當作佛？爲如菩薩。以有心故。必

當[ 合符線]作佛？⁰⁹⁰ 前別立因言，以未成佛之有情故。此因亦有他不⁰⁹¹ 定過。爲如菩薩種性，爲如決定二乘。

[ここで使用された因は不定因であるがゆえに批判になりえない。〈猶〉諸仏のごとく。〈因〉心があるがゆえに。〈宗〉成仏しないものだろうか。〈猶〉菩薩のごとく。〈因〉心があるがゆえに。〈宗〉必ず成仏するものだろうか。前において別途に立てた因は、未だ成仏しえない有情(=衆生)を念頭において言ったことであるがゆえである。このような因もやはり他派について不定の誤謬がある。菩薩種性¹³⁰⁾のごとくなのか、決定二乗¹³¹⁾のごとくなのか。]

若爲避此[ 聲點_□; 此上聲]，更[ 梵唄符 B_右上-上向; 更平聲]⁰⁹² 立宗言，無

性有情決定二乘，皆當作佛。以未⁰⁹³ 成佛有情攝[ 聲點_□; 攝入聲]故。猶如菩薩。


此有等難故，成不定。如⁰⁹⁴ 是三人，非當作佛。以無大乘無漏種子而非菩薩種⁰⁹⁵ 性攝故。如木石等諸無情物。


[万一，ここから抜け出すために、再び主張を立て、‘〈宗〉無性有情と決定二乗はすべて成仏するであろう。〈因〉いまだ成仏しえない有情に属するがゆえに。〈猶〉あたかも菩薩のごとく’と言うならば、これについても同等な批判が加えられ得るがゆえに、不定の誤謬を持つことになる。〈宗〉このような三人は成仏できないであろう。〈因〉大乘の無漏種子¹³²⁾もなく、菩薩種性に含まれないがゆえに。〈猶〉あたかも木石など無情物のごとく。]

又有比量相違過⁰⁹⁶ 失。謂、五種姓中餘四種姓，墮地獄時，應有四德。許⁰⁹⁷ 作佛故。如菩薩姓。許則違教，不許違理。此違自悟⁰⁹⁸ 比量過也。五量。

[また、比量相違の誤謬があることになる。すなわち、〈宗〉五種姓(=性?)¹³³⁾の中で、他の(残りの)四種姓(=性?)は地獄に落ちるときにも、四德¹³⁴⁾を持たなければならぬであろう。〈因〉成仏が認められるがゆえに。〈猶〉菩薩種性のごとく。これを認めれば、教学に背き、これを認めなければ、道理に背く。これは‘自ら知っていることと食い違う比量の誤謬’である。以上、5種類の量。]

第 14 節：我執・法執についての論破と関係した論議

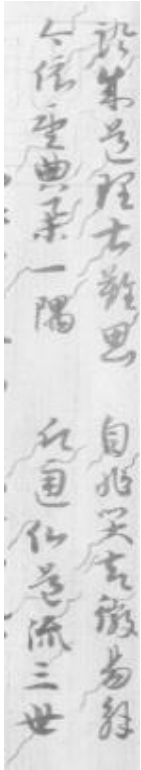
099 十四：成唯識論爲破我法，立比量言．凡諸我見，不緣實 100 我[ 梵唄符 B_右下 -上向；我_{上聲}]．有所緣故．如緣餘心．我見所緣，定非實我．是 101 所緣故．如所餘法．
[第 14 節：『成唯識論』においては，我と法を論破するために，比量式を立て以下のごとく言う．〈宗〉概して様々な我見¹³⁵⁾は，真の我を対象と見なさない．〈因〉対象があるがゆえである．〈猶〉あたかも他の事を対象と見なす心のごとく．〈宗〉我見の対象は決して真の我ではない．〈因〉対象であるがゆえである．〈猶〉あたかも他の諸法のごとく．]

又言：外道餘[ 角筆字 多留]乘所執諸法異心 102 心所，非實有性．是所取故．如心心所．能取彼覺，亦 103 不緣彼．是能取故．如緣此覺．
[また，言う．〈宗〉外道¹³⁶⁾や他の乗においては，執着する‘心心所¹³⁷⁾と異なる様々な諸法’は実在するのではない．〈因〉とらえられたもの[所取]であるのみであるがゆえである．〈猶〉あたかも心心所のごとく．〈宗〉とらえる側[能取]であるあの覺¹³⁸⁾もまたそれ(色法¹³⁹⁾)を対象と見なさない．〈因〉とらえる側であるのみであるがゆえである．〈猶〉この覺を対象と見なすことのごとく．]

判云：此中有四比量，104 是真能破．破我法故，無過生故．或因此破，破大乘 105 云：諸緣第八識見不緣阿頼耶相．有所緣故．如緣……

[批判的に論議してみれば，以下のごとくである．ここには 4 種類の比量式があるが，これは真の論破である．我と法を論破するがゆえであり，誤謬の発生がなきがゆえである．もし，このような論破によって大乘を論破して言うには，〈宗〉第 8 識を対象と見なす様々な見解は，阿頼耶識の相分を対象と見なすものではない．〈因〉対象があるがゆえである．〈猶〉あたかも(他のものを)対象と見なす(心)のごとく… …．]

卷末 廻向偈



※ 各文字の[梵唄符 B_]は省略.

證_[左下-下向_去聲]成_[右上-上向_平聲]道_[左下-下向_上聲]理_[左下-下向_上聲]甚_[左下-下向_去聲]難思_[右上-上向_平聲]

[證成の道理について考えることは至極難しいが]

自_[左下-下向_去聲]非_[右上-上向_平聲]笑_[左下-下向_去聲]却_[左上-下向_入聲]微_[右上-上向_平聲]易_[左下-下向_去聲]解

[我が笑って押しのけてしまわないで、少しでも易しく解説し]

今_[右上-上向_平聲]依_[右上-上向_平聲]聖_[左下-下向_去聲]典_[右下-上向_上聲]擧_[右下-上向_上聲]一_[左上-下向_入聲]隅_[右上-上向_平聲]

[今、聖なる仏典に依拠して、その一部を提示するので]

願_[左下-下向_去聲]通_[右上-上向_平聲]佛_[左上-下向_入聲]道_[左下-下向_上聲]流_[右上-上向_平聲]三_[右上-上向_平聲]世_[左下-下向_去聲]

[仏道が疎通し、いつでも続くことをお願いいたします。]¹⁴⁰⁾

卷末 筆写記



判比量論一写, 釋元曉述. 咸亨二年, 歲在辛未, 七月十六日, 住行名寺着筆租訖.
[『判比量論』1 卷, 元曉(617~686)作. 咸亨2 年辛未年(671), 7 月 16 日, 行名寺にとどまりて, 筆をとり, 負担であったことを終える.]

3. 残った課題

- 追加的な角筆点調査を通じた新羅語の音韻・文法などについての研究の深化及び元曉師の学問についての文体的研究の可能性打診
- 卷末の廻向偈についての仏教音楽史的研究の可能性打診
- 大谷大学蔵『判比量論』以外の散失部の解釈及び現存の断簡(11 行 東寺切, 9 行 落合博志 所蔵本など)についての調査及び判読と解釈

【原注】

- 1) 김성철(2003: 19, 2016: 273)総合.
- 2) 大谷大学図書館(編)(1998: 50)による.
- 3) 奈良時代の写経紙の 1 つであり, 麻紙(または楮紙; この資料の主要な部分の紙は楮紙と判断される)に白土を混入し, 防虫と荘厳のために香木(真弓)の粉末を入れて漉いた紙のことを言う.




- 4) 原文   ≡ 東宮 王義之 十七帖 (三行本) <大書源_顯>:[崔]→破. ※原文の字形は정재영(2016, ms.)から引用.

- 5) 原文    ≡ 東宮 王義之 十七帖 (三行本) <大書源_惠>:[崔]→過.

- 6) 原文    ≡ 東宮 王義之 十七帖 (三行本) <大書源:耶>:[富・신]→□(判読不能字).

7)=脚注 4)

8)=脚注 4)


- 9) 原文    ≡ 富・諄 <大書源_遮>:[富・諄]→□. ただし, [諄]は脚注において‘遮’の可能性を認める.

- 10) 原文    ≡ 崔・韓 <大書源_兩>:[崔・韓]→當當.


- 11) 原文    ≡ 崔・韓 <大書源_關>:[崔・韓]→開.

- 12) 原文   ≡ 崔 <大書源_在>:[崔]→立.

- 13) 原文   ≡ 諄 <大書源_墮>:[諄]→隨.

- 14) 原文  ⇒ 脚注 5): [富・諄]→忽, [崔・韓]→缺/欠.

- 15) 原文     ≡ 富・諄 <大書源_而>:[富・諄]→而云忽, [崔・韓]→問之缺/欠.

- 16) 原文  ⇒ 脚注 5): [富・諄]→忽, [崔]→缺.

- 17) 原文   ≡ 韓 <大書源_必>:[韓]→心.

- 18) 原文    ≡ 崔 <大書源_即>:[崔]→有.

- 19) 原文    ≡ 崔 <大書源_即>:[崔]→有.

20) =脚注 18)

21) =脚注 18)

22) =脚注 18)

23) =脚注 18)

24) =脚注 18)



25) 原文 ⇒ 脚注 19) : [韓]→所.



26) 原文 ⇨ 法 漢 諸 <大書源_諸>:[崔]→法.



27) 原文 ⇨ 足 漢 諸 <大書源_足>:[崔・韓・召]→並.

28) [韓] “爲成第八～聖言攝” 部分漏落.



29) 原文 ⇨ 似 王 似 之 <大書源_似>:[韓]→以.

30) [韓]漏落.

31) [신]漏落.



32) 原文 ⇨ 今 王 今 之 <大書源_今>:[신]→分.



33) 原文 (虫食?) ⇨ 平 漢 識 <大書源_識>:[崔]→□□識, [韓・신]→□□□, [召]→第八識.



34) 原文 ⇨ 前 漢 前 <大書源_別>:[崔]→前.



35) 原文 (虫食?) : [崔・韓]→二.



36) 原文 ⇨ 受 漢 受 <大書源_異>:[崔]→受.

37) =脚注 36)

38) =脚注 36)



39) 原文 (虫食?): [崔]→心.

40) =脚注 36)




41) 原文 ≡  <大書源_俱>:[崔]→但.

42) =脚注 41)

43) [韓] 漏落.



44) 原文 ≡  <大書源_害>:[富・心]→□.

45) =脚注 41)




46) 原文 ≡  <大書源_異>:[崔]→矣.

47) =脚注 41)

48) 削除部.




49) 原文 (文字の一部消える)≡  <大書源_俱>:[崔]→猶.

50) 原文  : [崔] 漏落.




51) 原文 ≡  <大書源_反>:[崔]→及.



52) 原文 ≡  <大書源_難>:[富・心]→塵, [崔・韓]→雖.



53) 原文 ≡  <大書源_弟>:[韓]→第.

54) =脚注 36)



55) 原文  𠄎  唐 陸陽南 行書千字文 <大書源_闕> : [富・韓]→闕.



56) 原文  𠄎  東晉 王羲之 十七帖 (上野和) <大書源_雖> : [신]→難.

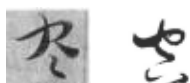
57) =脚注 55)

58) =脚注 36)

59) =脚注 55)

60) =脚注 55)

61) =脚注 55)



62) 原文  𠄎  唐 懷素 西嶽圖 貼 <大書源_空> : [崔]→盡.

63) =脚注 55)

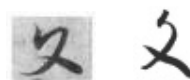
64) =脚注 36)

65) =脚注 36)

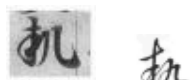
66) =脚注 4)



67) 原文  𠄎  東晉 王羲之 序化黃粉 帖 魏北明 <大書源_其> : [崔]→共.



68) 原文  𠄎  唐 懷素 西嶽圖 貼 <大書源_文> : [崔]→又.



69) 原文  𠄎  草韻 蘇林 <大書源_軌> : [崔]→執.



70) 原文  : [富・신]→注.

71) =脚注 4)

72) [韓] “又此二因～正因” 部分漏落.



73) 原文  : [韓]→由.



萬

あ

子

十

姓

悔

三

未

初

74

74

初

74

初

初

初

- 90) 即體能證：基体が異ならない能證，自證分と別個の実体ではないが，別個のもののように現れて見える証明者．〈김성철(2003: 219)〉
- 91) 相分：四分の 1 つ．認識対象．認識主観に現れた対象．
- 92) 眼識：六識の 1 つ．視覚器官[眼]によって視覚対象[色]を識別する心の作用．※六識：サンスクリット語 *ṣaḍ-vijñāna* 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根によって，色・声・香・味・触・法の六境を識別する眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の 6 種類の心の作用．①眼識：同上，②耳識：聴覚器官[耳]によって聴覚対象[声]を識別する心の作用，③鼻識：嗅覚器官[鼻]によって嗅覚対象[香]を識別する心の作用，④舌識：味覚器官[舌]によって味覚対象[味]を識別する心の作用，⑤触覚器官[身]によって触覚対象[触]を識別する心の作用，⑥意識機能[意]によって意識内容[法]を識別・認識する心の作用．〈『時空仏教辞典』〉
- 93) 四相の 1 つ．様々な因縁が集まり生じる姿．〈『時空仏教辞典』〉
- ※四相：
- (1)悟ることができていない衆生が顛倒した考えにおいて実在すると信じる 4 種類の分別心，すなわち，我相・人相・衆生相・壽者相を言う．〈下略〉
- (2)すべての人が皆経験することになる 4 種類の過程．一期四相または果報四相とも言うが，人生の，生・老・病・死を言う．
- (3)宇宙万物が生滅変化する過程を 4 種類によって説明すること．すなわち，すべての法の有為を説明することになり，四有為相と言う．①生相：万物が発生すること．②住相：万物が安住し，そのまま存続すること．③異相：万物が衰退していくこと．④滅相：万物が破滅してしまうこと．
- (4)宇宙の成・住・壊・空．〈『円仏教大辞典』〉
- 94) ‘不’字に去声点が記入されているので，‘不定’の漢字音が当時，[브덩>부정]であった可能性が高い．
- 95) 角筆字‘只’(ㄱ/ㄷ)が記入されているので，“當知”構文が，“반ㄷ기~아름디니라”程度に読まれたであろう．
- 96) ‘その 2 種類の因をすべて不定因にしまう．’〈김성철(2003: 402)〉，權仁瀚(2016:11)脚注 10)参照．
- 97) 『攝大乘論釋』：インドの学僧無性が解釈したものを，7 世紀中葉に唐の学僧玄奘が翻訳した．総 10 卷 11 分で構成されたこの論は，意識の作用によってすべてのものが生産され，小乗に比べた大乘の優越性を論じている．〈『1 冊で読む八万大蔵経』〉
- 98) 八識：眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識．〈『時空仏教辞典』要約〉
- 99) 異品：サンスクリット語 *vipakṣa*．因明において，主張命題である宗の述語と全く異なる性質に属する部類．〈『時空仏教辞典』〉
- 100) 異品遍無性：因三相の 1 つ．因明の三支作法において，主張命題である宗を立てることになった理由として提示された因が備えなければならない条件．例えば，‘言葉は無常である[宗]’，‘作り出したものであるがゆえである[因]’，‘作り出したすべてのものは無常で

ある。例えば、瓶のごとしである[喩]’において、因は宗の述語と異なった性質には全く含まれていないことが必要である。〈『時空仏教辞典』〉

- 101) 『成唯識論』: 護法などを作ること/唐の玄奘の翻訳。世親の唯識三十論頌についての十大論師の注釈書において、護法の注釈を中心にして、他の 9 名の論師の見解を取捨選択して、1 つの論書として編纂し翻訳した本。〈『時空仏教辞典』〉
- 102) 阿頼耶識: 阿頼耶はサンスクリット語 *ālaya* の音写であり、居住地・貯蔵・執着を意味する。……過去の認識・行為・経験・学習などによって形成された印象・潜在力、すなわち、種子を貯蔵し、六根の知覚作用を可能にさせる最も根源的な深層意識。〈『時空仏教辞典』〉
- 103) 俱有所依: 心[心]。心の作用[心所]と同時にありながら、その依る所になりそれに助けを与え作用を引き起こさせるもの。俱舍論においては五根、唯識説においては五根・第 6 識・第 7 識・第 8 識がここに該当する。〈『時空仏教辞典』〉
- 104) 真如: 仏教において意味する衆生心の根源になる真であり一途な心。〈『韓民族文化大百科』〉
- 105) 無為: 仏教において、様々な種類の原因・因縁によって生成されるものではない存在(*asam skṛta*)。時間的な生滅変化を超越する常住・絶対の真実であり、涅槃の異名としても使用される。〈『円仏教大辞典』〉
- 106) 白/畚: 仏に対してまたは菩薩相互間で謙譲を表す“語る類の動詞‘畚’”。現代語の‘申し上げる(사뢰다)’に繋がる動詞。〈南豊鉉 2013: 76〉

捷捷

- 107) 大書源_捷

- 108) 末那識: 末那はサンスクリット語 *manas* の音写であり、意と翻訳。阿頼耶識を絶え間なく自我と誤認し執着して、阿頼耶識と六識の間において媒介の役割をし、絶え間なく六識が起こるようにする心の作用であり、常に我痴・我見・我慢・我愛の 4 つの煩惱と共に起こる。阿頼耶識に貯蔵された種子を引きずり出し認識が成り立つようにして、考えと考えが絶え間なく起こるようにする心の作用。〈『時空仏教辞典』〉

- 109) 眼根: 六根の 1 つ。

※六根: 6 根とは、①眼根: 視覚器官と視覚能力、②耳根: 聴覚器官と聴覚能力、③鼻根: 臭覚器官と臭覚能力、④舌根: 味覚器官と味覚能力、⑤身根: 触覚器官と触覚能力、⑥意根: 思惟器官と思惟能力、などを指し示すが、この 6 根によって引き起こされた罪障を悔いることを、‘六根懺悔’と言い、そのように懺悔して 6 根を断ち清くなることを‘六根清浄’と言う。〈『斗山百科』〉

- 110) ㄷ 김영옥 Gim Yeong'ug キム・ヨンウク(2004: 87-88)〈

- 111) 能縁: サンスクリット語 *ālamba*。対象を認識する主観。〈『時空仏教辞典』〉

- 112) 心所法: 客観対象の一般性を認識する‘心王’の従属によって起こる精神作用。

- 113) 所依：サンスクリット語 *āśraya*. ①依る所，根源，基盤，根拠. ②有識説においては，色・受・想・行・識の五蘊*，または過去の経験を貯蔵している深層心理である阿頼耶識を言う. この2つは，人間生存の根源であるという意味で称する言葉. <『時空仏教辞典』>

* 【訳者注】生滅・変化するすべてのものを構成する5つの要素. すなわち，物質である色蘊，感覚印象である受蘊，知覚または表象である想蘊，心の作用である行蘊，心である識蘊を称する.

- 114) 法處：十二處の1つ. 意識内容，觀念.

※十二處：①眼處，②耳處，③鼻處，④舌處，⑤身處，⑥意處，⑦色處，⑧声處，⑨香處，⑩味處，⑪触處，⑫法處. <『時空仏教辞典』>

- 115) 能依：サンスクリット語 *āśrita*. 依る主体. <『時空仏教辞典』>

- 116) 相違決定：各々の比量式それ自体は論理的に妥当であるが，その結論が相反した2種類の比量式が同時に成立することを言う. <ネイバー 知識 in>

117)

九句因

| | | 異品 | | |
|----|------|-------|--------|-------|
| | | 遍有 | 遍無 | 亦有亦無 |
| 同品 | 遍有 | ①共不定因 | ②正因 | ③共不定因 |
| | 遍無 | ④相違因 | ⑤不共不定因 | ⑥相違因 |
| | 亦有亦無 | ⑦共不定因 | ⑧正因 | ⑨共不定因 |

<김성철 2006: 304>

- 118) 不共：共にすることができない.

- 119) 不定：①八識の中で，どの識と共に起こりもせず，特別な対象にだけ起こるわけでもなく，善・悪・無記でもない心の作用. 悔・眠・尋・伺がここに該当する. <『時空仏教辞典』>

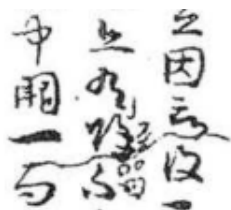
- 120) 同品：サンスクリット語 *sapakṣa*. 因明において，主張命題である宗の述語と同じ性質に属する部類. <『時空仏教辞典』>

- 121) 玄奘と共に『成唯識論』を翻訳した窺基の弟子のうちの1人.

“在我國，唐貞觀三年(629)，玄奘自長安啓程赴印度，就學於僧伽耶舍・尸羅跋陀羅・勝軍等諸論師門下。於研習諸學之外，玄奘亦修習因明。後歸返長安，將攜回之梵本因明諸書翻譯成漢文，並口授印度古今因明之梗概豫弟子窺基。其後，窺基注釋商羯羅主之因明入正理論，復記載玄奘所授之因明，而成因明入正理論疏一書，世稱因明大疏。其時，另有淨眼・神泰・文備・文軌・靖邁等諸學者輩出。……” <【因明】，<http://cafe.naver.com/citta/222>>

- 122) 『因明正理門論』：1巻. 大域龍の作，唐の義淨が翻訳. 新因明の概論書. <『時空仏教辞典』>

- 123) 不成因：因明用語。因明論式中、因(理由)須具備三相，方能成正因，缺乏任何一相皆成似因，其中因缺乏第一項而不能證明宗(命題)者，稱為不成因。〈『佛光大辭典』〉



- 124) cf.) 〈小林芳規(2003: 26)〉

- 125) ‘餘’字に角筆字‘多留’が記入されているが、これは現代国語の‘異なる(다른)’と解釈されることと一致する訓と見ることができる。これによって、今後、‘餘’字を可能な限り‘異なる’と解釈することにする。

- 126) 同品定有性：因三相の1つ。因明の三支作法において、主張命題である宗を立てることになった理由として提示された因が備えなければならない条件。例えば、‘言葉は無常である<宗>’，‘作り出したものであるがゆえである<因>’，‘作り出したすべてのものは無常である。例えば、瓶のごとしである<喩>’において、因は宗の述語と同じ性質に含まれていなければならない。〈『時空仏教辞典』〉

- 127) 異品遍無性：因三相の1つ。因明の三支作法において、主張命題である宗を立てることになった理由として提示された因が備えなければならない条件。例えば、‘言葉は無常である<宗>’，‘作り出したものであるがゆえである<因>’，‘作り出したすべてのものは無常である。例えば、瓶のごとしである<喩>’において、因は宗の述語と同じ性質には全く含まれていないことが必要である。〈『時空仏教辞典』〉

- 128) 窺基の弟子のうちの1人。脚注 121)参照。

- 129) 無性有情：五性の1つであり、仏になる基礎がなく有漏種子を持った性品。〈『漢字辞典』_Naver〉

※五性：法相宗において、先天的に定められている衆生の素質を5種類に差別したもの。

- ①菩薩定性：菩薩の素質を持っている者。
- ②縁覚定性：縁覚の素質を持っている者。
- ③声聞定性：声聞の素質を持っている者。
- ④不定性：菩薩・縁覚・声聞のうちどの素質なのか定められていない者。
- ⑤無性：清浄な性品になる可能性が全くない者。

〈『時空仏教辞典』〉

- 130) 菩薩種性：菩薩の修行を積み必ず悟りに到達することができる人。〈心|作成者 임기영 <http://blog.naver.com/dlpul1010/220715530753>〉

- 131) 二乗：乗は衆生を悟りによって引導する仏の教えを意味する。衆生を悟りによって引導する仏の2種類の教え。

- ①小乗：自身の悟りだけを求める修行者のための仏の教え。

大乘：自身も悟りを求め、他人も悟りによって引導する修行者のための仏の教え。

②声聞乗：声聞を悟りに至らせる仏の教え。

縁覚乗：縁起の道理を注視し悟った縁覚についての仏の教え。

＜『時空仏教辞典』＞

- 132) 無漏種子：悟りに至ることができる原因として阿頼耶識に潜在している原動力。＜『時空仏教辞典』＞
- 133) 五性各別説：①声聞定性，②独覚定性，③菩薩定性，④不定定性，⑤無有定性。＜『韓民族文化大百科』要約＞
- 134) 四徳：涅槃に備わっている4種類の性質・特性。常・楽・我・淨。＜『時空仏教辞典』＞
- 135) 我見：①我という見解。自我という見解。②我に変わらない固有の実体があると執着する間違った見解。自我に変わらず常に独自の存続する実体があると執着する間違った見解。＜『時空仏教辞典』＞
- 136) 外道：①仏教以外の教えを言う。六師外道・六派哲学などがここに該当する。これに反して、仏教は内道と言う。②間違った教え。＜『時空仏教辞典』＞
- 137) 心心所：心と心所。※心所：サンスクリット語 *caitta*。サンスクリット語 *caitasika*。五位の1つ。心所有法の略語。対象の全体を主体的に認識する心王に付随的に起こり、対象の部分を具体的に認識する心の作用。＜『時空仏教辞典』＞
- 138) 覚：仏教における悟り。法の実体と心の根源を悟り知ること。＜『韓民族文化大百科』＞
- 139) 色法：五位の1つ。感覚器官とその対象，そして形象もなく感覚されもしない作用・力・潜在力。＜『時空仏教辞典』＞
- 140) この廻向偈についての韓泰植 Han Taesig ハン・テシク(普光)(1994: 15)における解釈は以下の通りである。

證成の道理は至極推し量ることが難しく

自ら笑うことができないことだ，易しく解釈できないことを。

今，聖典に依拠し，一部分を挙揚するので

願わくば仏道が通じ，三世に流転させたまえ。

この中で，第2句については，富貴原章信(1967:25)以来，解釈に難しさが指摘されてきた。筆者としては，‘笑却’を‘笑ってしまう’と解釈すると同時に，否定詞‘非’は‘未’の間違いと見て，‘いまだ自ら笑ってしまうことができないことだ，易しく解き明かすことができないので’程度に解釈することが，最善ではないかと考える。11月26日の口訣学会月例研究発表会においては，이건식 Yi Geonsig イ・ゴンシク 教授から，‘却’字を接続詞的に解釈する可能性，김영욱 Gim Yeong'ug キム・ヨンウク 教授から，‘微’字を‘拈華微笑’と結び付けて解釈する可能性を提案された。お二方に感謝申し上げ，今後の論議を約束する。

(浜之上幸訳)

【参考文献】

1. 辞典, 図録類

- 大谷大学図書館(編)(1998), 『大谷大学図書館所蔵貴重書善本図録-仏書篇-』, 大谷大学.
小林芳規(2004a), 『角筆文献研究導論 別卷 資料編』, 東京: 汲古書院.
慈怡(主編)(1988), 『佛光大辭典』, 高雄: 佛光出版社.
정재영(2016, ms.), 『판비량론 자형 집성_원문순』
編集部(2007), 『大書源』, 東京: 二玄社.
한국불교전서편찬위원회(1979), 『韓國佛教全書 1』, 동국대학교출판부.
『두산백과(斗山百科)』_NAVER 지식백과 제공.
『시공 불교사전(時空仏教辞典)』_NAVER 지식백과 제공.
『원불교대사전(円仏教大辞典)』_NAVER 지식백과 제공.
『한 권으로 읽는 팔만대장경(1冊で読む八万大藏經)』_NAVER 지식백과 제공.
『한국민족문화대백과(韓民族文化大百科)』_NAVER 지식백과 제공.
『한자사전(漢字辞典)』_NAVER 지식백과 제공.

2. 論文類

- 權仁瀚(2016), 「古代 韓國漢字音의 研究(I)-최근 발굴된 角筆 聲點 資料를 중심으로-」, 『口訣研究』 37, pp.5-38.
김성철(2003), 『원효의 판비량론 기초 연구』, 지식산업사.
_____(2006), 「원효의 논리사상」, 『普照思想』 26, pp.283-319.
金永旭(2004), 「判比量論의 國語學的 研究」, 『口訣研究』 12, pp.81-97.
南豊鉉(2013), 「東大寺 所藏 新羅華嚴經寫經과 그 釋讀口訣에 대하여」, 『口訣研究』 30, pp.53-79.
富貴原章信(1967), 「判比量論の研究」, 神田喜一郎(編), 『判比量論』, 東京: 便利堂, pp.1-76.
小林芳規(2002a), 「韓国における角筆文献の発見とその意義-日本古訓点との関係-」, 『朝鮮學報』 182, pp.1-82.
小林芳規(2002b), 「大谷大学蔵新出角筆文献について-特に, 『判比量論』に書き入れられた新羅の文字と記号」, 『大谷大学図書館報』 19, pp.4-6.
小林芳規(2004b), 『角筆文献研究導論 上卷 東アジア編』, 東京: 汲古書院.
小林芳規/尹幸舜(訳)(2003), 「新羅經典에 記入된 角筆文字와 符號-京都.大谷大學藏 『判比量論』에서의 發見-」, 『口訣研究』 10, pp.5-30.
申賢淑(1988), 『元曉의 認識과 論理-판비량론의 연구』, 민족사.

이영무(1973), 「元曉大師 著 『判比量論』에 대한 考察」, 『建國大學校學術誌』 15, pp. 165-187.
韓泰植(普光)(1994), 「頌歌에 나타난 元曉思想」, 『東國論叢(인문사회과학편)』 33, pp. 1-37.